

## 第1回 新しい地域づくりビジョン有識者懇談会 産業経済分科会

日時：平成 25 年 8 月 30 日 午前 10 時～12 時

場所：愛知県自治センター 8 階 会議室 D

### <知事政策局長あいさつ>

委員の皆様方には、大変お忙しいところ、また、残暑厳しい中、新しい地域づくりビジョン有識者懇談会の産業経済分科会の会議にご出席いただき、心より感謝申し上げます。

県では、今年度、2030 年頃の社会を展望し、2020 年までに取り組むべき重点的な戦略を明らかにする、新しい地域づくりビジョンを策定いたします。ビジョン策定に向けて、専門的見地から検討していくため、7 月 18 日に有識者懇談会を設置し、そのもとに、この産業経済分野をはじめ、県民生活、県土基盤の 3 つの分科会を設置することといたしました。

先日の第 1 回目の有識者懇談会では、目指すべき将来像や重点的に取り組む課題について、大所高所よりご議論いただいたところですが、分科会につきましては、各分野のまさに第一線で活躍されておられる学識者や地域の経済団体の方々に委員をお願いしておりまして、将来像や取り組むべき政策面について、より具体的な絵姿や、アイデア・ご提案をいただきたいと考えております。

さて、ここ愛知は、35 年連続で日本一の製造品出荷額等を誇り、多額の貿易黒字を稼ぎ出すモノづくり立県であると同時に、農業の面でも、全国第 6 位の産出額を有し、大都市圏としては特異な産業構造を持ちながら、日本の成長をリードする活力を維持しております。

しかしながら、2030 年を展望いたしますと、新興国の技術力向上、アジア諸国をはじめとするグローバル市場の拡大、あるいは農林水産業での TPP の問題などを背景に、国際競争がますます激化していく中、モノづくりをはじめとする愛知の産業について、いかに競争力の強化を図っていくかは非常に大きな課題であります。

こうした中、自動車や航空宇宙を基幹産業として維持・強化しつつ、これに続く新たな成長分野の育成・振興や、リニア開業も見据えた大都市圏に相応しい高度なサービス産業の集積など、当地の産業の多様化・高度化を図っていくことが不可欠であります。

あわせて、こうした高度で活発な産業経済活動を担う人材を、地域として、いかに育て、確保していくのかという視点も大変重要であると考えております。

本日は、議論のきっかけとしていただくよう、事務局でペーパーをご用意いたしましたが、第 1 回目の会議でございますので、それにとらわれず、皆様の日頃の活動や研究成果などを踏まえつつ、広くアイデアやご提案などをいただければと存じます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

### [事務局から出席者紹介]

### <内田座長>

それでは早速議事に入ってまいりたいと思います。本日の議題は「2030 年の社会を展望した産業経済分野の課題と今後の政策の方向性について」です。愛知県の産業構造の特性として、製造

業の集積が非常に高いということがありますが、一方で、サービス産業のウェイトがなかなか高まってこないという面もあります。また、大都市圏には珍しく農業県でもあり、今回の TPP の議論もある中で、全国の農業の 6 次産業化の成功のモデルケースにもなり得る地域としても今後、注目されてくると思います。また、2027 年のリニア中央新幹線の開業のインパクトは非常に大きく、リニア後の社会経済を展望する分科会の意義は非常に大きいと考えております。皆様にはリニア時代を見据えた活発な議論をお願いしたいと思います。

それでは、議論の前提となります資料について、事務局から説明をお願いします。

#### [事務局から資料説明]

##### <内田座長>

ありがとうございました。

それでは早速皆様から順次ご意見を伺っていきたいと思います。本日は、事務局から説明をいただいた中で、特に資料 4 をたたき台として、また、これにとらわれることなく幅広く皆様のお考えやアイデア・ご提案などを頂戴できればと考えております。

今の事務局の説明を伺いまして、2030 年の愛知県を展望する上で 2027 年のリニア開業がカギになると考えています。愛知県が首都圏へのストロー現象を防ぐことが出来るだけの魅力ある地域になるためにはどのような方向性や政策が必要なのか、また、首都圏と愛知県がシナジーを生み出しながらツートップでやっていくことが、日本全体の競争力の浮沈のカギを握るという前提の下で、自動車産業の海外の利益が県内に再投資され、グローバルに資金が循環するような仕組みをどのように構築できるかをご議論いただきたいと思います。

本日の進行ですが、大きくは前半と後半に分けまして、前半では、資料 4 の左側の網掛け部分、産業経済面で目指すべき愛知の将来像についてマクロ的な視点でご議論していただきたいと思います。この部分については、モノづくりとサービス産業、農林水産業に分類していただいておりますが、例えば、観光やインフラ整備、農商工連携など、幅広くご意見を頂戴したいと思います。後半につきましては、資料 4 の右側の部分、目指すべき愛知の将来像の実現にあたって必要な政策について、具体的にご提案を頂戴したいと考えております。

それでは、さっそくですが、前半部分の目指すべき将来像について、名簿順にご意見を頂戴いたします。まず、金澤委員から中小企業や都市型産業を中心にご意見をいただければと思います。

##### <金澤委員>

名古屋商工会議所の金澤です。よろしくお願いします。

ご案内のとおり、商工会議所は全国で 514、県内で 22 あり、それぞれの地域で、中小企業振興と地域の活性化に取り組んでおります。名古屋商工会議所も中小企業を中心に 1 万 6 千の会員のもと、いろいろな活動を展開しております。

その中で、私は、事業計画や中期計画等の取りまとめをしております。私どもも、来年度、中期計画の見直し時期に差し掛かっておりますので、今回、勉強もさせていただければと思っております。

まず、将来像についてですが、少子高齢化、グローバル化、新興国の台頭等が進み、国際分業

が加速する中で、ヒト・モノ・カネの行き来が世界的レベルで活発化しております。それを巡って、国家間のみならず、都市間レベルでの競争が激化しており、製造業を強みとする当地域が、現状を放置すれば産業の空洞化も懸念されるという状況にあると考えております。

そうした状況を踏まえ、名古屋商工会議所では、2009年に、この地域が目指す将来像を「街の魅力と技術の先進性で世界の交流の舞台となる『世界交流都市・名古屋』」と位置づけ、3か年ごとの中期計画を定めて、取り組んでおります。

名古屋といいましても、名古屋市の区域ということではなく、市周辺を含めた「名古屋都市圏」ということで考えております。そして、「世界交流都市・名古屋」のイメージとして、4つの像を考えておまして、1つが「イノベーションが進む産業・技術先進都市」、2つ目が「ドラマチックな魅力・個性発揮都市」、3つ目が「交流や創造が広がるグローバル都市」、4つ目が「高い意識が支える環境・快適提案都市」を掲げております。

そして、当地の発展のために狙うターゲットでございますが、最近少し陰りが見え始めたと言われておりますけれども、依然として高い市場性、成長性を秘めておりますアジア等の新興国市場とそうした国々の富裕層が一番のターゲットになるのではないかと考えております。また、国内ということと言いますと、高齢化市場がひとつの大きなターゲットになるのでしょうし、今後、海外にも売っていける分野なのではないかと考えております。

名古屋商工会議所でも、航空宇宙産業や次世代自動車産業のほか、高齢化市場を睨みまして、医療機器分野にも力を入れているところであります。

そうしたことを踏まえまして、目指すべき将来像としては、海外の旺盛な需要を獲得するために企業が積極的に海外に展開する、あるいは域内ではリニア開通により当地の立地特性が一段と優位になりますので、そういったものを活かして、各社のマザー機能の集積や次世代産業の振興、それから海外の富裕層に当地に来てもらい、お金を使ってもらおうということでインバウンドの推進、そのためには、やはり観光産業とか、小売、サービス、宿泊など3次産業の振興というものも非常に重要かと考えております。

それから、そうした産業を支える産業インフラ、例えば、リニア開通に伴いまして一番の課題となる名古屋駅の乗換利便性の向上や、あるいは名古屋駅と高速道路との直結、それから、貿易黒字を続ける名古屋港や、セントレアの2本目滑走路の整備など、産業インフラが充実される形の中で、国内外から、あるいは国内外へ、ビジネス客や観光客、あるいは高度人材が行き来し、集まるような姿にするべきではないかと考えております。

### <内田座長>

ありがとうございました。

ただいまご意見のありました名古屋駅のスーパーターミナル化の方向性につきましては、別の分科会でも深掘りすることになっておりますが、やはり製造業のウェイトの高い産業構造やまちづくり、地域性や県民性といった概念を大きく変えるほどのトリガーになり得るプロジェクトだと見ております。先ほどご指摘いただいた「イノベーション」、「ドラマチックな魅力や個性」、「交流や創造が広がるグローバル」、「環境」という4つの方向性についても、いずれもモノづくり分野での底上げという観点があるほか、加えてソフトやシステムといった面での底上げにも言える方向性だと思います。愛知県としても、製造業、非製造業両面で、具体的な方向性を持ってやっ

ていく必要があるのではないかと考えています。

それでは、続きまして、モノづくりの高付加価値化やソフト化も含めて榊原委員にご意見を頂戴したいと思います。

### <榊原委員>

関西大学の榊原です。私の方からは、自動車産業と地域経済、さらには三大都市圏としての名古屋という観点から、少し意見を述べさせていただきたいと思います。

我々の分野では、「トヨタショック」なのか「強い名古屋」なのかということで、名古屋の評価は非常に割れております。

「強い名古屋」として、リーマンショック以前の愛知県の強い経済に対して高い評価があった一方で、リーマンショック後、トヨタの問題も含めて、愛知県の経済がどのようになってしまったのかということでかなり悲観論も出ております。

このような中で、この地域の経済をどのように考えるのかについて、まず、三大都市圏の3男坊としての名古屋というのが、今後、有りうるのかという点については、かなり難しいだろうと考えております。すなわち、いわゆる大都市圏、特に全国・世界レベルでの中枢管理機能を持っている都市は、日本には東京しかなく、大阪、名古屋も地方中枢都市に徐々に近づいているという厳しい認識を持った方がいいのではないかと考えております。

その一方、大阪の地盤沈下が指摘される中で、「強い名古屋」という話があったのは何故かと考えると、やはり製造業を中心としたモノづくり機能、地域経済と結びついた産業の強さ、こちらの方は大阪と大きく違う点だと考えております。今後どうなるか分からないところもあるのですが、歴史的にみれば、当地の強みというのは、私は、産業首都としての名古屋だと考えておまして、それは、単なるモノづくりだけではなく、それを支える人材や、さらには中枢管理機能、研究開発機能を含めたトータルの意味でのモノづくり、これが地域経済と結びつくことによって独自の産業を発展させている点にあると考えております。

ただし、当地の産業構造は、輸出型なので、域外経済の変化に対しては非常に弱いという点があります。このような弱さも持ちつつも、同時に強さも持っている、このような状況が現時点での名古屋・愛知なのではないかと思えます。

その上で、質問も含めて、今後、都市圏というものをどのように考えていくかということで、リニアが開通すると5,000万人に拡大する後背地を有する大都市圏と資料4に書かれておりますが、これはどのような大都市圏をイメージしているのでしょうか。名古屋と東京が一体化するというイメージで書かれているのか、それとも、もう少し違う意味があるのか。と申しますのは、現状1,000万人からと書いてありますが、東海地方、さらに愛知県の強みというのは、「規模」ではなく「質」だと私は考えております。これは人口規模がもっと大きい、例えば大阪圏で考えればなんですが、規模は大きいかもしれませんが、例えば、質の面では非常に問題が多い。逆に当地域というのは、そこまでの人口はありませんが、愛知県を中心に非常に強い産業を持っておりますので、人口規模自体はそれほど大きくなかったとしても、総生産額も大阪に肉薄するレベルになっておりますし、全体として非常に強みを持っていると思います。それをリニア開業後にどのように考えていくのか、果たして東京と一体として5,000万人というふうに考えていいのか、それとももう少し違う考えがあるのかということについて考える必要があるのではないかと思います。

ます。

### <内田座長>

ありがとうございました。

関西経済については、当社でも三大都市圏の景気予報をそれぞれプレスリリースしておりますけれども、関西は良くも悪くも安定しており、近年は低水準で上がってこないという状況である一方、当地域は世界景気に左右されやすい構造ではありますが、いい時は他地域に先行してそれなりに景気水準は上昇し、日本経済の牽引役であるという立場にあります。愛知県の強みと弱みは、資料2でもご紹介いただきましたように、「モノづくり文化」への依存度の高さであり、産業構造や地域性、県民性といったあらゆる面で浸透しているところが大きな特徴なのだと思います。

今、榊原委員からご質問のありました東京の品川とリニアで40分で行きつなげた時の効果は、首都圏近郊の主要都市と同じ時間距離の土俵に上がるというよりは、それらとは異なる、高度なモノづくり機能を持った都市圏のシナジーを発揮することが重要だと思います。具体的には、愛知県の高付加価値製造業と首都圏のソフト産業との融合によって、日本経済の競争力を維持・強化するという方向性なのかなと思います。

それでは、次に、山田委員から、県域を越えた広域的な視点や今後の成長分野を中心にお話をいただきたいと思います。

### <山田委員>

中部経済連合会の山田でございます。よろしくお願いたします。

私も、中部経済連合会は、中部5県をカバーしている団体でございます。愛知県を中心とした中部圏の中期ビジョンというものを、我々も現在検討しております、そういったところからお話をさせていただきたいと思います。

まず、この中部圏の特徴ということでございますけれども、やはり、この中部圏はこれまでの長い産業の歴史におきまして、常に時代の変化を感じて、自由で新しい発想と創意工夫を兼ね備えた先人たちの努力によって、次々と新しい産業を興し、そして時代を築き上げてきたことにあるということでございます。各地にも伝統産業、あるいは地域の特性を活かしたモノづくりに関する地場産業も数多く存在します。ですので、モノづくりへのこだわりというのは、この地域内、それから企業内にしっかりと根づいていて、今後も、この中部圏は、やはりモノづくりを中心に頑張っていく地域ではないかということが挙げられると思います。

ただし、これまでの自動車産業のいわゆる一本足打法の状況から、今後、産業構造の多様化を図っていく必要があると思っております。具体的には、「次世代自動車産業」、「航空宇宙産業」、「低炭素・資源リサイクル産業」、「長寿ヘルスケア産業」、「観光産業」の5つを次世代リーディング産業として提唱させていただいております。これらの育成・振興を図るとともに、あわせて、地域に根差した中小企業、地場産業、それから農林水産業の振興も非常に重要であると考えております。

また、ただ単にモノづくりをとということではなくて、新しいステージへとステップアップさせていく必要がありまして、やはり「プロダクトアウト」という考え方から、もう少しモノとソフト産業を一体化させて、お客様に対する新たな価値を提供していくことが必要ではないかと考え

ております。

同時に、グローバル化時代の対応といたしまして、国内における研究開発力、商品開発力の強化を図っていく必要があるとも思っております。これからも中部圏のモノづくりの DNA を生かして、環境変化に対応して、発展し続けるモノづくりにおける世界のトップランナーというのを中部圏はずっと目指していくべきであると思っております。

それから、産業を考えると、どうしても人づくりの話になります。企業活動はもとより、地域を支える人材は、その地域がしっかりと育てていく必要があると思っております。企業活動がグローバル化していく中で、それに対応する人材や技術者などの高度人材の育成のみならず、やはりもう少し基礎的な教育のレベルアップといったところが必要だと思えます。それから、女性・高齢者・外国人の活用に関しても色々な支援制度の整備が必要と思っております。特に、グローバル人材の育成、あるいは留学生の活用が求められるでしょうし、それから、外国人労働者の受入に関しては、慎重かつ深い議論が必要であると思えます。

また、最後に農業に関してでございます。昨日、「中央日本交流連携サミット」を開催し、『食』から考える中部の未来」というテーマで、中部 5 県の知事、副知事、名古屋市長をお迎えいたしまして、シンポジウムを開催したところでございます。その中で、当会の会長の発言にもありましたが、やはり農業というのは、食糧供給や国土保全など、我が国が存続していくために欠かすことができない重要な産業であり、成長の余地も大きいと認識しております。「食」の視点からは、消費者の安全に対するニーズ、それから高齢者の健康に対する関心というものも高くなっておりまして、国産の原料を使用した安心・安全なものを提供することで、市場の拡大も期待できるでしょうし、また、世界の人口増加に対応して、生産量を増やしたり、あるいは富裕層に対して「安心・安全」で「品質が良い」、「おいしい」という、日本に優位性のある需要の拡大が見込まれておりまして、日本の農業というのは、まだまだこれから対外的にもビジネスチャンスがあるという中で、農業者の方々と企業との協力・連携、あるいは地域間の連携を図りながら、この地域のブランドというものを確立していけば、農業というのは、これからビジネスになるという議論が昨日のシンポジウムではございました。

#### <内田座長>

ありがとうございました。

今、山田委員から、5 つの新規事業分野と可能性の高い分野についてご紹介いただきました。中部経済産業局も「八ヶ岳構造創出戦略」を掲げておりますが、やはり一つの産業で自動車産業の成長分をカバーすることは至難の業だと思えます。自動車や航空宇宙産業の最先端技術を他産業に転用することが不可欠だと思えます。また、資料 2 で、愛知の将来像を考える上で、海外で稼ぐ力を強くすべきではないかという視点がありますが、競争力を維持するためには海外進出は不可欠で、さらに海外での利益が県内に循環するという産業構造を意識して、今後、産業や企業の育成や誘致を強化していかなければならないと考えております。

財務省の法人企業統計によると、ここ数回の景気循環における当地域の設備投資水準は、2002 年からの上昇局面では、全国比で相対的に高い水準で推移していたのですが、2009 年以降の回復局面では、一貫して全国よりも低い水準で推移しております。新興国でのシェアを取るためには設備投資も海外に向かわざるを得ないということで、海外で稼ぐ力を維持した上で、県内に資金

が循環する仕組み、すなわち産業構造の転換をしなければ将来的には厳しいのかなと思います。

山田委員からグローバル人材の活用の話もありましたけれども、米澤委員には、そうしたグローバル人材、特にソフト面での高度人材を生かせるような今後の方向性について、また、今後の大学のあり方等についてもお話をいただきたいと思います。

### <米澤委員>

私の専門は産業や経済ではなく、教育や大学の競争力なのですが、大学自体が一種の知識サービス産業の中核になってきておりますし、グローバル人材の必要性という面でお呼びいただいたと思っています。

まず、愛知県ですが、教育の統計からみると、大学教育において重要な役割を果たしております。具体的には人数ですが、東京には14万人ぐらい大学生がおりまして、次が神奈川、大阪の約5万人、その次が名古屋で4万1千人ぐらいとなっています。数の面では、日本の中でも人材育成におきまして、かなり大きな役割を果たしているという言い方はできると思います。ただし、他の大都市とかなり違うところは、地元から進学する率が非常に高いということでありまして、具体的には愛知県で学ぶ大学生は3分の2が愛知県の出身です、さらに東海まで含めるとかなりの割合になります。自都道府県の出身比率は、先に挙げた他の大都市圏だと半分以下になりますので、非常に大きな違いがあります。同時に、県の方からみれば、愛知県の7割近くの高校生が、愛知県の大学に進学しており、進学先を確保ができているとも言えますが、ある意味で外から人が入ってこないというところが、大きな問題であるとも考えています。

また、卒業後の進路について、私は名古屋に来たのが3年くらい前で、以前は東北大学にいたのですが、東北大学では、学部・修士課程修了者の8割が県外の企業に就職しており、東北地方で仕事がなく、東京や大阪に出ざるを得ないという状況です。これに対して、幸いなことに名古屋大学は、実は、国立大学の中ではトップクラスの就職率を誇っていて4割くらいの学生が県内企業に就職しており、おそらく東京などに本社がある企業での地元採用を合わせれば、大半の学生が地元で就職ができていると言ってよいのではないかと思います。すなわち、愛知県や東海地域は、企業はグローバルに活躍していかなければならないのだけれども、大学を卒業して就職するまでは非常に地元指向であるというところに、大きなギャップがあると思います。

留学生については、例えば、日本福祉大学では福祉だけではなく、海外への国際協力について学ぶ国際福祉開発学部をもっておりますし、豊田工業大学はシカゴにキャンパスがあるなど、いろいろな意味で国際的に個性のある大学や教育機関がそろっております。しかし残念ながら、留学生の獲得数で言いますと、東京の次に大阪、京都、福岡の後に愛知が来るということで、基本的にはグローバル人材の獲得が教育の面からは出来ていないと言わざるを得ないと思っております。

また、国からの愛知県の教育や研究への投資は、残念ながらプライオリティが高くないと言わざるを得ないという状況があります。旧帝国大学の中での予算規模というのは、人数や設置年順によるところもあり、東京大学が一番多く、次が京都、東北、大阪、九州、北海道となっております、最後に名古屋という状況です。研究パフォーマンスで言えば、我々は、かなり高いものを持っているのですが、予算が来ないという状況の中で、苦しんでいるのが実態でございます。また、工業分野に関して、愛知に名古屋工業大学と名古屋大学と2つの国立大学があつて工学分

野の教育を分かれてやっているのがいいのかということが指摘されており、国からのサポートが決して強くない状況です。実は歴史をたどってみると、名古屋大学自体が地元の要請や資金提供を受けて出来た大学であって、国立と言っても国が積極的に作った大学ではないということがあります。

一方で、産業の面でも、残念ながらグローバル企業である愛知や名古屋の企業というのは、必ずしも地元の大学の研究開発能力にすごく期待しているわけではなくて、自前で研究開発能力がありますし、世界的な視点で大学との連携をしている状況にあるという問題がございます。

次に、グローバル人材の関係で、名古屋大学では大学院に国際開発研究科が外国人の留学生などを対象に英語で教育を行うために20年以上も前に設置され、また、名古屋大学は例えばアジア圏での法整備や農業分野でもいろいろな形での国際貢献をしております。国際開発研究科では、留学生に日本社会について知ってもらうために愛知県の市町村を中心として国内実地研修も実施しております。その中で、我々の学生たちが現在注目しているのは、当地のブラジル人などのコミュニティの姿です。これはある意味で、愛知県の産業を支える重要な人材なのですが、その子弟となる第2世代・第3世代のブラジル人の子どもたちが、残念ながら、日本の学校の中で有効な形で自分たちのキャリアをつくっていくことができていません。一方で、ブラジル自体が今、BRICsの一国として、それこそ航空機産業もありますし、経済成長していますので、帰国したいと考えていても、ブラジルの大卒の資格がないとやっていけないため、ブラジルのオンライン教育が、愛知で受けられて、通信制で学士の資格を取って帰国をしようとしている方々もいらっしゃるようです。このように、いろいろな形でグローバル人材の確保と言っているのですが、子どもの世代まで考えた時の彼らの定着をきちんと出来ているのかというと、課題が大きいのかなと考えております。これは、ブラジル人に限らず、アジア圏などその他のコミュニティでも同じような問題を抱えております。

最後に、産業経済面とは違う切り口で、学生や若者から見た魅力ある地域として、愛知県がどう映っているのかにも関心を持っています。私自身、普通に働いて家庭を持って暮らすうえでは、愛知は非常に住みやすいところだということは実感しておりますし、若者達のおしゃれな独自の文化も確かにありますが、例えば学生街のような若者にとって本当に魅力のある場所というのは、我々が思っている住みやすい街の中に溶け込んでしまっているようで、意外と少ないのかなと感じます。それから、リニアに関連して、若者にとっては、新幹線自体が非常に高い乗り物で、バスを使って大阪に行ったりするのが実態でありまして、そういう意味では、リニアが開通する中で産業面の中核の人材は交通の面で利便性を保持しながら、一般的なところで、安価な形での便利な交通手段を確保していくことが結果的に魅力ある地域づくりにつながるのかなと思います。

#### <内田座長>

ありがとうございました。

私も東北の出身でして、東北大学の出身者が半分以上も東北に残らないというのは、産業基盤がないので、そうなのかなという気もいたしますが、名古屋大学の多くの学生が地元で就職するという点について、就職の地元志向もそこまで強いのかなという印象を改めて持ちました。再三再四、愛知県や名古屋は、堅実なモノづくり文化がかなり広範囲に影響しているということを申し上げておりますが、以前、名古屋大学に来ていた中国人留学生に聞いても名古屋はいろいろな



面で3番目と言っておりました。まず、世界的にみると、本当に優秀な中国人留学生はアメリカへ、その次が欧州に行って、日本は3番目になると。さらに日本の中でも東京、大阪、名古屋と3番目のポジションだということでした。これは名古屋が製造業に強みを持った地域だということを生かせていないのだと思います。先ほど、ブラジル人留学生の話もありましたが、ブラジルにはMRJと競合するエンブラエルという航空機メーカーがありますし、新興国として成長を遂げていてマーケットも期待できる国とつながりを持つ人材をうまく活用できていない点は非常にもったいないと感じます。

また、長年にわたって培われてきた堅実なモノづくりの風土を一気に変えるというのは難しいと思うのですが、そうした中で、教育の果たす役割、大学の果たす役割は重要だと考えますし、学生や若者にとって魅力ある街づくりが不可欠というご指摘から逆算して、例えば、街づくりから新しい風土を作り上げていくということも必要なのかなと思います。

それでは、ここで農業分野についても簡単にご意見を頂戴したいと思います。今日は農業がご専門の青山委員がご欠席されておりますけれども、日本のTPP参加も念頭において、高付加価値化・6次産業化は避けられないと思います。専門外とは存じますが、各委員のご専門との絡みで、ご発言をいただけることがございましたら頂戴したいと思います。

#### <金澤委員>

6次産業化ということですが、名古屋商工会議所では少ないんですが、県内では、豊橋や常滑、春日井などの商工会議所で取り組んでいると承知しております。農業の場合、レストランに品を納めるとか、ジャム等に加工するとしても、ロットが少ないところがあり、そうした点では、特に小規模事業者との関わりがしやすい分野でもあろうかなと思います。

#### <榊原委員>

私も農業についてはそれほど詳しくはないので、もう少し広く考えて愛知県の自然くらいの感じで述べさせていただければと思うんですが、最終的に人が住む場所としての愛知県をどのように築いていくのかという考え方は非常に重要かと思います。ひたすら産業ばかりが集積している、そのような場所に住むのは果たして良いことなのかということです。愛知県は、農業もあって、自然もしっかり残っている。住む場所という考え方からすれば、名古屋から少し離れば、このような農や自然に触れられる場所があって、新鮮なものも食べられるということで、非常に大きな可能性があるのではないかなと思います。産業の話を考えるときに、先ほど名古屋駅の話も出てきましたが、どうしても、まちづくりだとか文化、そういったものまで含めて考える時代にきているのではないかと思います。そういった点で、農業も産業としてだけ見るのではなく、人が住む場所として農業がある、自然があるというような視点も必要なのではないかと思います。

#### <山田委員>

8月9日に開催された中部圏知事会議では、地域連携によるブランド食材の販売促進などの話がされたと伺っています。各地には既にいくつか農産品のブランドというのがあります。それらの食材を組み合わせると何かひとつの弁当として販売をしたり、どこかのイベントに共同で出展をするといった形で、各地のひとつだけのブランドではなくて、中部圏のブランドのような広い範

圏で PR していかれた方が、例えば、世界に農産品を輸出していくことを考えた場合、愛知県の何々ということでは、世界の国からなかなか受け入れられないと思いますので、中部ブランドや JAPAN ブランドという形で、この地域の農産品が PR できてればいいのではないかと考えております。

#### <米澤委員>

農業の専門では全くないので十分な答えはできないかもしれませんが、ひとつは、高付加価値なものを一般に売る場合に、既にお話があったように、世界的なブランド力はどうしても必要だと思います。

また、私どもの大学では、バイオの研究にかなり力を入れてきたわけでございますし、それを活かして国際的な協力として、アフリカやアジアに行ったり、そうしたところから学生が来て、県内の農業の現場に触れて帰っていくということが行われています。そうしたつながりをうまく活かしていくという道もあるように感じます。

#### <内田座長>

ありがとうございました。

やはり食品加工機械メーカー等も含めて中小企業の持つ技術で、愛知県内で農業の高付加価値化に貢献できる部分は大きいと思いますし、定住人口を増やすという観点でいうとアグリツーリズムというのがきっかけになって、雇用のあるこの地域に定住してもらうという方向性も模索すべきなのかなと思います。

愛知県は、農業産出額で見ますと全国 6 位というポジションなんですけど、食品製造業の付加価値率で見ますと 10 位程度に下がります。全国平均よりは高いんですけども、製造業が強い分、農水産業と関連するような食品製造業ではそれほど強いわけではなく、当地域の農林水産資源を第 2 次産業、第 3 次産業とマッチングしていけば、競争力の確保ができるのではないかと考えています。

それでは後半部分の将来像実現に向けての政策の方向性についての議論に入りたいと思います。資料 4 で見ますと、右側の部分、「重点的に取り組む施策の方向性」というところで、今ご議論いただきましたマクロの方向性を前提にして、それを実現するための具体的な施策についてご発言をいただきたいと思っています。それでは、順に金澤委員からご発言をお願いします。

#### <金澤委員>

まず、先ほどの農業の関係で追加でお話をさせていただきます。通常、農業の 6 次化と言いますと、地場野菜など元々地域にあるものを使ってというのが多いかと思いますが、刈谷商工会議所の取組として、「坊ちゃんかぼちゃ」の事例があります。「坊ちゃんかぼちゃ」は、他の地域で生産されているんですが、糖度が非常に高く、洋菓子やお菓子に 응용が利くということで、そこに目を付けて、逆にお菓子メーカーや刈谷市内の業者に働きかけ、さらには、協力機関や高校等も一緒になってメニュー開発などを行い、そうした動きの中で、農家も「坊ちゃんかぼちゃ」の生産に乗り出すというような形で、元からあるものではなくて、逆に、流通や活用方法から、生産につながるという事例もありましたので、ご紹介します。

次に、必要な施策の方向性ということでございます。資料のほうで、次世代自動車や航空宇宙

産業など注目すべき産業分野、あるいはマザー機能の維持・強化、海外展開支援など、必要な施策の方向性は示されていると思いますが、そのほかに感じましたことと、中小企業振興の視点から述べたいと思います。

まず、モノづくりに関して、次世代自動車、航空宇宙産業などの次世代産業ですと、そこに使用される部素材等も高度化が求められてまいりますので、高度部素材分野の振興というものも非常に重要になるかと思えます。特に、当地は、次世代自動車とか次世代住宅等に使用される燃料電池とか蓄電池に取り組む企業の集積がありますので、電池分野も大きな分野と思っております。そして、そういった高度部素材の製造過程では、当然、加工技術等も高度なものが要求されることから、例えば、メッキや折り曲げ等の加工などで、中小企業にもビジネスチャンスが出てくるのではないかと考えております。そうした中で、「知の拠点あいち」にあります「シンクロトン光センター」は電池の開発等にも非常に有益な施設と伺っておりますし、また、同じく「知の拠点あいち」には、各種の高度計測分析機器や3Dプリンターなども設置されておられますが、まだまだ、中小企業の方はどう使ってよいのか、そうした機器の有用性が十分に認識されていない部分もあるのかなと考えております。地域にそうした機能がございますので、技術力にうまく生かせるよう産学連携も含めまして取り組んでいく必要があると考えております。

もうひとつ、モノづくり白書等で「グローバル・ニッチ・トップ企業」ということで、市場分野が小さい中でも占有率を高め、グローバルな展開を図る企業を目指すべきだという話がございます。この地域にも、高度な技術力を有する中小企業も多いことから、そういった取組への支援も必要と思えます。例えば、鋳造部門でBtoCの調理器具に進出した「魔法のフライパン」を作っている錦見鋳造や、あるいは、ホーロー鍋の「バーミキュラ」を作っている愛知ドビーなどは、インターネットで申し込んでも、すこし待たないと手に入らない状況と聞いております。そういった「グローバル・ニッチ・トップ」の予備軍とも言える中小企業がこの地域に存在すると思えますが、中小企業は、自社技術がどのように応用できるのかがなかなか分からない、あるいは、販売方法などマーケティング力に弱い面があります。そうした点で、東京都が「モノづくり中小企業」とデザイナーの連携の場づくりとして、「東京デザインマーケット」というような取組もやっていますので、そのような仕組みづくりも必要と考えております。

また、名古屋商工会議所で、今年、パリの国際エアショーに、ミッションを派遣して出展企業との面談等を行いました。参加した中小企業の話をお聞きすると、実際に海外企業との取引等を考えていくと、メールでやりとりするにしても、英語に精通した人材がいなかったため不安があるという人材確保面の声がありました。

それから、航空機産業や医療機器産業に乗り出すべく、マッチングの場も用意しておりますが、この地域の自動車関係の方々には、大量生産に慣れており、いざ具体的な話になってきますと、航空機産業や医療機器産業は受注ロットが少ないため、ただでさえ余裕のない人員やラインを割り当てることに躊躇されたり、また、本業の自動車産業が忙しくなるとなかなか難しいということが、現実面の課題としてあると聞いておりますので、そのあたりをどうしていくのかということもあります。

それから、第3次産業の関係でございますけど、農業の6次化とともに、モノづくりのサービス化、5次産業化といったような第2次産業と第3次産業の融合を促進していくことも非常に重要と考えております。国では、クールジャパン戦略ということで、各地域のコンテンツやデザイ

ン、ファッション、ポップカルチャーなど、いろいろなクリエイティブな産業や資源を活用した地域活性化の取組を進めております。この地域も、例えばデザイン分野でいきますと、インダストリアルデザインやグラフィックデザイン、あるいはインテリアや建築士など、15の団体が一堂に会した「中部デザイン団体協議会」という組織があったり、「ナゴヤファッション協会」が長年にわたって若手の登竜門のファッションコンテストを続けているというような事例がありますし、また、県も関わっておられる「愛知ぼぷかる聖地化計画」や「デジタルコンテンツコンテスト」、あるいは知多半島の各市町村にあやかった美少女アニメキャラクター「知多娘」や、食の分野でも「名古屋めし」など、様々な取組があります。しかしながら、それぞれの取組が縦のところで留まっており、なかなかそうした存在が横に知られていないというところがあります。こうした当地域の取組について、関係者が一堂に会して、どのような連携を深められるかといったことも検討する必要があるのではないかと考えております。

### <内田座長>

ありがとうございました。

農業分野では、地場産品を中心に高付加価値化を狙うというのが理想的だとは思いますが、**「坊ちゃんかぼちゃ」**の事例のように、他地域の農産品でも洋菓子のような付加価値の高い分野に着目した取組であれば、地元の雇用創出にも貢献する分野であり、**6次産業化**もかなり広範囲の分野で可能性を追求できると思います。

それから、産学連携や**2次産業と3次産業の融合**については私も同感です。今まで産学連携というと理科系分野で有名大学との高度な研究開発や技術開発連携がメインでしたけれども、むしろ今後は、中小・零細企業の競争力を引き上げていくうえで、地元私大の文化系学部や女子大等と企業が組んで、ちょっとした発想の転換でマーケットを創り上げて行くような方向性というのが重要になると思います。例えば、一宮市では、「**コスプレタウン構想**」に取り組んでいますが、この取組が、疲弊している地場の繊維産業の高付加価値化と結びついて、コスプレのコスチュームを日本製・一宮製で精巧に製造し、海外のコスプレイヤーに買ってもらうというような実業の再生にもつながる成功事例が多く出てくると、かなり変わってくると思います。そうした点で、今、愛知県が実施している**トリエンナーレ**や**デジタルコンテンツコンテスト**、**ポップカルチャー振興**といった取組の方向性というのは非常に意味があり、あとは実業とのマッチングの機会をどう作っていくのかということだと思います。

続きまして、榊原委員からご意見を頂戴したいと思います。

### <榊原委員>

まず大枠として、先ほど少し申し上げましたように、産業の競争力強化といったときに、これまでのような政策から、さらには、まちづくりや文化づくり、そういった観点まで最終的に広げていく必要があると考えています。これは最終的には親会議の有識者懇談会の方でまとめたことだけになるのかと思いますが、産業と人の生活は、今後、切り離すことができないと考えていますので、それをどのように融合させていくのか、そういった点をまず考える必要があると思います。

もう少し細かい話で、製造業について話をさせていただきたいと思います。愛知県の製造業に

関する片寄りというのは、強みなのか弱みなのかということで、いろんな議論があるかと思いますが、私個人としては製造業でいくべきだと考えています。その理由はいくつかあるんですが、まず、愛知県が持っている中枢管理機能や研究開発機能、いわゆる大都市圏の機能に属する部分は、あくまで製造業の現場と結びついた機能になります。仮に製造業の現場を愛知が失ってしまった場合、こうした本社機能だけが残りうるのかを考えると、非常に難しいのではないかと考えています。愛知県というのは、本社機能が名古屋に集中せずに西三河などに分散しており、これはまさに製造業の現場が本社機能を引っ張っている、地域経済としてみれば、まれな事例だと思います。これは、製造業の現場と本社機能というのが一体化しているものだと思える方がよいのではないかと思いますので、弱点はありつつも、製造業のもっている可能性をひたすら追求していくという面に関して、私はその方向でいくべきだと考えています。

そうした中で、まず、現在、愛知県の自動車産業に競争力があるのかという点についてです。例えば、トヨタがハイブリッドカーを世界的なものにして、その一方で、追随者が非常に多くなり、ついにホンダからトヨタのハイブリッドカーを超える自動車が出てくるだろうという状況の中で、トヨタはピンチだという話があります。しかし、これは逆の見方が出来て、かつて、ハイブリッドカーというのは、いわゆるガラパゴスであり、流行らないというようなことが言われていました。それにも関わらず、環境車ということでこれだけ人気が高まったというのは、ある意味大成功だと思えることができます。さらに言えば、ホンダのハイブリッドカーというのは非常に最先端のものなので、おそらく利益率が低いと思われそうですが、逆にトヨタはハイブリッドカーを大量に量産しているので、1台あたりの利益率というのは、圧倒的に違うと思います。今後の産業について、こういった新しい企画だとか、新しい製品をどれだけ定着させることができるのかという点で考えると、これまでのトヨタのハイブリッドカー戦略というのは成功であったと思います。さらに、一定期間は、開拓者としてブランド的なイメージを持つことになりしますので、しばらくは、こういった自動車産業の強さというのは続くのではないかと考えています。もちろん、これは世界経済の影響を非常に受けるという状況の中にありますので、浮き沈みはあるかと思いますが、トヨタショックといわれるような方々が悲観するほど、私は悪いものではないと考えています。

その上で、自動車産業と他産業との関係について、先ほど一本足だというお話がありましたが、その件に関しては、私自身も賛成で、自動車産業が発展している間に、他の産業をどのように発展させていくのか、こういった観点は大変重要だと思います。しかし、自動車産業が他の産業にどの程度波及するのかについて考えていくと、この点に関しては、いくつか難しい問題があるのではないかと思います。当地の自動車産業のシステムというのは大変素晴らしいものですが、これが果たして、企業のシステムなのか、愛知県全体が持っている地域のシステムなのかという観点で考えれば、前者としての意味合いが非常に強いだろうと思います。要するに、愛知県は企業城下町であって、その中での強さであって、それが地域としての強さにどの程度つながっていくのかという点に関しては、未知数なところが非常に多いと考えています。

その中で、素材だとかこういった分野に関しては十分に波及がありうると思いますし、さらには、トヨタ生産方式だとか、このようなビジネスのやり方自体について、地域の競争力の核になりうるという面として、地域システムとして、それを広げていくことができるのかどうかといった観点が重要なのではないかと考えております。

### <内田座長>

ありがとうございました。

とことん製造業だけでいくのかというところでは議論の余地があるかと思いますが、行けるところまで行くという姿勢で、ある意味でディフェンシブな分野としては製造業の高付加価値化は非常に重要だと思いますし、攻めの分野ではソフト産業やサービス化という側面も不可欠で、両面をバランス良くやっていくということなんだと思います。例えば、トヨタも、1ドル90円になれば輸出競争力が戻り、100円になれば国内回帰も加速するとかつては言っていたんですが、実際に100円前後になっても、国内の設備投資はなかなか出てこない状況です。雇用に関しても、愛知県の期間従業員を中心とした求人倍率は回復していますが、一方で、常用雇用に関しては、全国比で弱めの水準で推移しています。設備投資や雇用が国内や県内に波及しにくくなっている構造を前提に、トヨタグループでも介護ロボットや植物工場などへの新規分野への参入を進めて、雇用維持を目指す方向に転換しているのかなという印象もございます。こうした中で、製造業の高付加価値化で頑張るという視点はもちろん重要ですので、その方向性での具体的な施策も進めていく必要があると思います。

それでは、続きまして、山田委員からお願いしたいと思います。

### <山田委員>

中部経済連合会では、毎年、中部圏5県の各地を訪問し、地元の企業の方の声をいただいて、私どもの事業計画に反映するというをやっております。その中で、当地の産業の高度化、多様化についてお話を伺うと、やはり、地域の企業がいかに人材を確保し、育成していくことができるかが重要であるとの声が多くあります。将来の産業の見通しを立てたところで、それを支える人材がきちっといないことには、企業にどれだけ良いものがあったとしても成長しないということになるので、まず第一に、人材の確保、育成が大事であると考えております。

その人材育成をいかにやっていくのかについては、先ほど申しましたが、地域が主体となって、人材育成をやっていくのが基本であると思います。しかしながら、地域で必要な人材を育てることができなければ、他の地域から、あるいは海外も含めて、招いてくる必要があると思います。先ほど名古屋というのは非常に地元の方の就職が多いというお話を伺いましたが、そうしたところも必要ならば崩しながら獲得していく。そのためには、企業側も、どのような人材が必要なのかを社会に対して積極的に情報発信していく必要があると思います。ある県での話では、やはり自然科学系、理数系の方が欲しいであるとか、あるいは英語を中心とした語学ができて、さらに、英語ができるだけの人材ではなくて、きちっとしたコミュニケーションが取れて、ちゃんとビジネスの話ができる人材、こうした人材を欲しがっているということは、各地の中小企業も含めた現状であると思います。

それから、やはり法律や税制の問題。何かを始めようとする規制の枠がありますので、そういった規制の枠もできるだけ撤廃する、あるいは特区にするなど、そういった施策もやっていく必要があると思っています。

さらに、当然の話ですが、地域間の連携、あるいは産学行政の連携を密にして、その地域として産業力をいかに高めていくのが、今後の政策の骨格として一番重要なことではないかなと思っています。

### <内田座長>

ありがとうございました。

中部圏内もしくは愛知県内と、地域内でも格差がかなりある状況の中での人材の移出入、交流というものによって、それぞれの圏域を活性化していくような、何らかの仕掛けというものが必要になってくるのかなと思います。

次は米澤委員にお願いいたします。

### <米澤委員>

いろいろお話が出ていまして、私がここで提言すべきなのは、幅広い国際化というのをどうやって成り立たせるのかということだと思います。

まず、グローバル人材なのですが、国が作った定義がございまして、ひとつは、社会人基礎力と言うのですが問題解決能力など社会人にふさわしい一般的な能力があること、それから、次に英語を含めた国際言語でのコミュニケーション能力で、これも言葉だけでなく、きちんとした話ができるというものです。3番目は、多文化を理解して活用する能力ですが、異文化に接してそれを同じ人間として理解するまではできるのですが、いろいろな国や地域から来た人たちと一緒に会議をしたり、仕事をしたときに、それをリードして交渉して、いろんなことができるという能力、これが決定的に出来ていないというのが産業界から出てきている議論です。最後に、地域への帰属意識も含めたアイデンティティがあるというようなことです。しかし、こういう定義が出てきてしまうと、一種のスーパーマンみたいな人材をイメージしてしまいます。しかし、実態として、当地の産業がモノづくりを基盤としている点で考えた場合には、超人的な人材のみではなく、幅広い国際人材像みたいなものを持っておく必要があるのではないかと感じています。

具体的には、同じ外国人を獲得する場合にも、一方で高付加価値の最先端の研究開発であったり、あるいは金融などの分野できちんと役割を果たせる方々が必要で、こういう方々が地域に根ざすためには、どうしても、英語で授業を行うインターナショナルスクールのような学校が必要です。これは、名古屋に3つありますが、おそらく、当地の産業をより発展させていくためには、公立の学校の中で、ある程度そういうものを担っていく必要があると思います。名古屋大学の附属高校も、いま、インターナショナル・バカロレアという国際的な基準に合わせたプログラムをやろうと話をしているんですが、公立の枠の中でもできないかと思っています。

異文化理解の関係では、私の家族は、今たまたまメルボルンにいて、愛知県とビクトリア州との交流の中で、娘がメルボルン郊外に通っている小学校が大府市の小学校と交流をし、代表団を相互に派遣しています。そのような、いろいろな形で国際交流を進めているのは非常にいいことだと考えています。

もう一点、難しい課題ではあるのですが、製造業を一般的に支える人材獲得についても、個人的には門戸を開いていくべきと感じております。そのためには、必ずしも英語社会で生きる外国人だけをイメージしないで、いろいろな国から人が来るという前提で、そうした方々の教育の問題であったり、定着の問題であったり、あるいは、地元に戻っていくのであれば、出身国との関係でも積極的な支援をしていくべきだと思います。

そして、次に、これは勝手なお願いかもしれませんが、国が行っている留学生に対する奨学金等の支援のプライオリティと、地域が求めているプライオリティが必ずしも一致しない状況にあ

ります。具体的には、今の社会でも日本語での教育、日本語での就業が大事であり、それを支える上では、漢字語圏というか、中国・韓国からの留学生がどうしても必要なんですが、そこに多くの希望者がいるながら、実態としては、奨学金があまり出ていないという状況があります。

もうひとつは、名古屋大学の日本人の学生を見ていると、国際的な経験を積もうという努力をしない理由のひとつに、企業に入れば研修の機会があって海外に行かしてもらえるのではないかという甘えを感じます。それは事実として大企業ではあるかもしれないけれど、必ずしも全ての企業にあるわけではないのが実態です。産業界側が自分たちで育てるということが、ずっと続くとは思わないので、地元の教育機関をうまく活用して、そこと一体となって国際的な経験を積ませて、それが結果的に地元の中で育って行って、グローバルに活躍して、愛知の産業を支えていくというような仕組みを一日も早く作っていく必要があるのではないかなと思います。

### <内田座長>

ありがとうございました。

お話のありましたグローバルな視点での人材活用の観点では、愛知県は日系人の定住人口が非常に多い地域ですし、例えば、トヨタも現地工場の技術力を担うタイ人技術者を愛知県の本社工場に呼んで、タイでのトヨタ生産方式というものを定着させる教育の取組をやっています。当地域に関わりのあるグローバルな人材を域内で活用できるような仕組みも不可欠で、製造業中心の産業構造の下では、特にアジアとの繋がりを重視すべきだと思います。

では、全体を通じて追加のご意見があればいかがですか。

### <企画課長>

一回目の議論の際に、榊原委員のほうから、リニア開業による 5,000 万人の大都市圏の中で、愛知県はどういった戦略を考えているのかとのご質問がございました。

おそらく県土基盤分科会での議論になってくるんだと思いますが、ひとつは、三大都市圏というのは、そういう形にならず、東京一極集中になるんだろうと思います。そうしたことに関連して、象徴的に言えばですが、愛知は 3 男坊から 2.5 男坊になっていきたい、それを東京の力を使って実現していくというイメージです。東京の力をこちらに引っ張ってくるために、東京にあるものの中でいくつかをこちらで分担をしていく、おそらくそれはモノづくりが中心になっていくだろうと考えておりますし、そういう形でリニアの 5,000 万人の大都市圏を位置づけていくのかなと思っています。

もう一つ、大阪と愛知・名古屋は地方中核都市にならざるを得ないという話でしたが、そうすると、後背圏の人口が多いほうにより機能が集中していくわけでございます。その際に愛知が有利なことは、リニアが大阪に 20 年先行して開通するという時間があることだと考えています。この期間に、ある意味、北陸圏や関西圏からいかに力を得ていくかという、そういう戦略も一つあるかなと思っています。

今お話したことは、まだ詰められた議論ではございませんが、そんなことができればなということを考えています。



### <榊原委員>

東京と名古屋が時間距離で短くなったときに、ひとつの都市圏に近づくであろうという前提の下で3男坊から2.5男坊へというお話だと思うのですが、そのときに、東京から名古屋に来る機能はどういったものを想定されているのでしょうか。

### <企画課長>

実際には難しいとは思いますが、やはりモノづくりに関連する分野で考えていくのかなと思っています。もちろん理想的には首都圏のバックアップ機能という考え方もあるんですが、行政面でのバックアップと、企業面でのバックアップとでは、多分コスト感覚が違うと思います。行政の方はお金を掛ければできるんでしょうが、企業の方となるとどうかなと。そのあたりはまだ十分な議論に至っておらず明確な回答は出来かねるところです。

### <内田座長>

名古屋と東京のそれぞれの強みを融合するということと言うと、やはり、製造業の周辺産業が名駅周辺に首都圏からシフトしてくるのが理想的かつ現実的なのかなと思います。これまでは難しい状況下もありましたが、リニア開業を見据えて、例えば、トヨタがデザインセンターや設計部門をすべて名古屋に集約するといったドラスティックなことでもあれば、相当なインパクトのあるエンジンになると思います。この地域に立地した方が効率的で、より高付加価値化に貢献できる企業の誘致や育成により、新産業のシナジーを生み出さなければいけないと思います。

### <榊原委員>

リニア開通が大阪より20年早くという話が出てきましたが、その点に関しては私も重要だと思っています。北陸新幹線がどうなるのかという話も絡めてなんですが、20年間、名古屋がリニアの西の拠点になるという意味は非常に大きいと思います。資料4の1,000万人から5,000万人というのは愛知県と首都圏を足した人数で考えていると思いますが、愛知がリニアの西の拠点になるということは、逆に愛知の後背地がもっと西に延びる可能性というのも十分にあると思っています。先ほど大阪から奪うというようなニュアンスの言葉もあったかと思いますが、そういった方向性でやるというのも面白いのではないかと思います。

### <内田座長>

リニアの開業については、別の分科会で集中的に深彫りすることになりますが、名古屋止まりの期間が長ければ長いほど、愛知県が西日本の玄関口のポジションを高めるわけで、国の財政状況が厳しい中では、首都機能の一部が移転してくる可能性も今以上に高まると思います。また、民間企業も本社機能のバックアップ、あるいは、製造業のマザー工場の周辺にあったほうが望ましい機能も含め、名駅周辺に立地する可能性は有りうるだろうと思います。そういう意味では、モノづくりの非常に堅実な風土を「守り」とするならば、「攻め」の部分、つまり今まで製造業が軽視してきた分野でウェイトが低かった部門の集積を高められないかなと考えています。

それでは、ひと通りご意見を伺いましたが、ほかにご意見はございませんでしょうか。

### <米澤委員>

一点、災害対策は、外国人がたくさん入ってくればかなり深刻な問題になりうると思います。研究者が英語を話せたとしても、その家族はまったく英語も日本語もできないということは普通にありうることです。例えば、つくばとか東北地方とかには、かなりそういう経験、情報があると思いますので、その辺から、ぜひ学んで、明確に何らかの対策を立てるということを発信できるといいと思います。

### <内田座長>

確かに、グローバル化というと、マーケットだけではなく、生活をしていく、働いていくという観点も不可欠です。語学面のサポートや災害対策での対応も重要になってくると思います。こちらについては、県でもいくつかの取組を進めているかと思いますが、そういったところも、より具体的に加速させていくということも重要だと思います。

以上、各委員の皆様から様々な意見をいただいたところですが、やはり、今回の委員の皆様の専門分野というのがかなり多岐に渡ってしまっていて、それだけ、愛知県の製造業中心の産業構造をさらに高度化していく、もしくは、そこからより脱却してソフト化・サービス化の方にシフトしていくにしても、いろんな切り口からサポートしていかなければいけないということの裏返しなのかなと思いました。

活発にご議論いただいた内容を県の施策の方向性に反映させていくことができればと考えています。

それでは以上で議事のほうを締めまして、事務局にお返ししたいと存じます。

### <知事政策局長>

本日は、産業経済分野における、この地域が目指すべき社会像や政策の方向性などについて、大変有意義なご意見・ご提案をいただきました。いただいたご意見・ご提案につきましては、しばらくお時間をいただき検討させていただきたいと思います。そうした検討を踏まえ、今後、事務局においてビジョン骨子案を取りまとめ、11月頃に第2回の分科会を開催したいと考えております。

日程につきましては、改めて事務局より調整をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

これをもって本日の分科会の方は閉会とさせていただきます。ありがとうございました。